

温度感応で溶出する肥料を利用した水稻追肥省略多収技術 <追補>
(農試環境部・県北分場)

1. 背景とねらい

昭和61年度に温度条件だけで肥効が調節される被覆尿素肥料を利用した基肥1回施肥法について指導上の参考事項に供したが、高標高地ややませ地帯では検討していないため使用適用外であった。その後これらの地域で被覆尿素的配合割合をかえて検討した結果、初期のLP-100日タイプ、70%配合肥料が、県北、高冷地、やませ地帯でも実用化できることを実証したので、指導上の参考事項に供したい。

2. 技術の内容

- (1) 県北、高冷地、やませ地帯で被覆尿素入り肥料を利用する場合も、現行の被覆尿素70%と、速効性窒素30%の窒素成分比でリン酸、加里を配合した肥料で対応できる。
- (2) 被覆尿素入り肥料の水稻基肥施肥基準量は、昭和61年度指導上の参考事項に準じ、次の通りとする。

施肥の区分	主な土壌条件	基準窒素施肥量	肥料形態
全層施肥	黄色土	* (基肥量+追肥量) 相当量	・被覆尿素(100日タイプ)と速効性窒素肥料を組合せたものを用いる。 ・窒素成分比で被覆尿素70%、速効性窒素肥料30%とリン酸、カリを配合したものとする。
	褐色低地土 灰色低地土 灰色台地土	* (基肥量+追肥量) 相当量の80~90%	
	多湿黒ボク土	* (基肥量+追肥量) 相当量の70~90%	
側条施肥	褐色低地土	* (基肥量+追肥量) 相当量の80~90%	
	黄色土 多湿黒ボク土	* (基肥量+追肥量) 相当量の70~80%	

* (昭和63年農業改良指導指針；土壌型別基準施肥量)

- (3) 各地域の基肥施肥基準を厳守する。特に、良食味品種の作付拡大に伴い、品種の耐肥性や耐倒伏性を考慮して、基準量を越えない。

3. 指導上の留意事項

- (1) 被覆尿素入り肥料を利用する場合の基本的な留意事項は、昭和61年参考事項に準ずるが、とくに次の点に注意する。

留意点<昭和61年>

- ①被覆尿素は、温度条件によってゆっくり溶出する。従って、低温年次では肥効が遅れ、出穂・登熟に影響すると考えられるので、基準の窒素施肥量を厳守し、過用はしない。特に温度条件の低い県中北部では注意が必要で、基準窒素施肥量の下限值とするのが望ましい。
- ②被覆尿素を利用する施肥法の出穂期は、従来の施肥法と変わらないが、成熟期は2～3日遅れる傾向なので、適地・適品種を作付する。
- ③基肥1回施肥では、初期生育がやや抑えられ、葉色も薄く経過する。6月中・下旬には、慣行施肥並以上の生育となり、葉色が濃く推移し、窒素吸収量も多い。出穂期以降までこの傾向は続き、稈長もやや長くなる。従って生育期間中の追肥は過繁茂や倒伏をまねくので実施しない。
-

- (2) 現在の被覆尿素入り肥料として流通しているものには、窒素成分の配合比は同一（被覆尿素70%、速効性30%）であるが、窒素成分の高い肥料（15-20-15）と低い肥料（10-20-20）の2種類があるので、地域特性に応じて選定する。
- (3) 高冷地ややませ地帯の被覆尿素入り肥料利用による栽培では、慣行施肥に比べ初期生育が抑制気味となるので、茎数確保ため健苗育成につとめるとともに、疎植にならないように注意する。
- (4) 生ワラや未熟堆厩肥の施用は、水稻の初期生育を抑制し生育の中後期に肥効が発現する。一方、低温下では被覆尿素的溶出も遅れぎみになることから、有機物は完熟堆肥を施用する。